

十一章 ミラノ最後の秋（その二）

夫族の社交で思い出すのが、スウェーデン人のカリーの家である。月報の配達に行くと、イタリア人の旦那がにこにここと「マドカ、何を飲む？」と尋ね、カリーはでんとソファに腰掛けて「あたし紅茶」などと言っている。「え、そんな」とわたしが恐縮していると

「あのね、マドカ、僕の友だちが来たら、カリーが茶を入れてくれるから、僕は友だちと話してる。カリーの友だちが来たら僕が茶を入れる。そしたらカリーはずっと友だちと話ができるだろう？」

なんと合理的。

なんと男女平等。

感心して家に帰って夫にその話をすると、夫は納得し、以後、わたしに来客があるときに家にいれば、夫が客に茶を出してくれるようになった。日本の男にしては、ものにこだわらない、面子（メンツ）を気にしない、いい男なのである。女房の女友だちに茶を出したくらいで、彼の「おとこ」は下がらない。

面子といえば、カレンとクリスの夫婦がこれまたいい例である。共にイギリス人で、クリスは夫の直属の上司、カレンは国際クラブにわたしを引き入れてくれた恩人で、役員を一緒にやった。このカレン、半分黒人の血をひきながら成績優秀、若くして小学校の校長をしていた、というだけあって、気も押し出しも猛烈強い。友人と話をしているときに亭主が口を挟（はさ）むと、「あんたは黙ってなさい！ もういつも余計なこと言って！」とぴしゃりとやりこめる。蠅（はえ）叩きで蠅をたたき殺さんばかりの勢いで、国際的大企業の間管理職を務める夫の顔をつぶす、なんてものではない。

それがクリス、「ちえっ、これだからなあ」とは言うものの、友人や同僚、部下の目の前で蠅並みに扱われているのに、面子を傷つけられたとか、すねて卑屈になる様子がかけらもない。見ていてこっちは冷や冷やするのだが、当人は、こんな些細なことでは男の価値はまったく下がらない、といった感じで、度量

の広い男とはこんなものかと感心したものである。

イギリス人のニックも、この「男の面子」について興味深いことを言った。

アラブ圏から、イタリアのわたしと同じ団地に越してきたニックは、世界を股にかけて仕事をしている。棚の上にわたしの故郷の大内人形が飾ってあるところを見ると、日本にもずいぶん仕事で行っているらしい。

そのニックが、「人情なんて西洋だろうが東洋だろうがそんなに変わりはないよ」と言う。

「だけど、面子は違うな。それくらいだよ」

メンツ、英語では顔（face）という。日本語でも顔をたてるとか顔をつぶすとか言うから同じことである。

そのときはわかったような、わからないような気がして生返事ですませたが、わたしの亭主があとで、俺も同感だと解説してくれた。彼はここイタリアで、イタリア人を始め、イギリス人、スウェーデン人、アメリカ人などの何百人という社員の中で、唯一の日本人どころか唯一のアジア人として働いている。その亭主いわく、

「西洋の『おとこ』にも誇りはあるよ。それは自分が自分に感じるものだ。だけど、他人が自分をどう見ているかにかかわる面子は、そもそも概念としてないね。だから、人前で失敗したら恥ずかしいと思うことはあっても、自分の面子がつぶれたとは思っていない」

「それ、いいね。めんどくさくなくて」

「そうだよ。日本人の面子を立てるのははめんどくさいよ」

西洋のおとこにただあるのは、日本のおとこのメンツよりはるかに傷つきにくく、したたかで、しなやかで、肩に力の入らない、自尊心である。

つけ加えると、夫がこの時期からよく言っていたことに、「完全無欠な人間はいない」という台詞（せりふ）があった。人間は失敗するものである、と。

たぶんこの背景には「完全なのは神のみ」という一神教の考えがある。古くからの格言でも「過ちはひとの常、赦（ゆる）すは神の業（わざ）」と言う。夫

は欧米で仕事をするあいだ、よく「人間だから失敗するよ」という台詞を聞いていたのではないか。

が、絶対神の考えの薄い日本では、人間が完璧を目指して努力する。

それ自体は悪くない。が、人間が完璧であり得るという前提も、そのうえに立った、失敗を考慮しないシステムもまちがっている、と夫は言うのだ。

「だって、人間なんだからどっかで失敗するのはあたりまえじゃないか。コンピュータだってトラブルも入力ミスもある。絶対失敗しないなんて無理だよ。システムをつくるなら、どっかに失敗を織りこんでおかないと、実際に失敗が起きた際に対処できない」

確かになあ。

日本人はマジメ過ぎるから、「失敗してあたりまえ、なんて心の隅で思ってるから気がゆるんで失敗するんだ。ダメダメ、絶対失敗しちゃいけない」なんて考えちゃうんだよなあ。頑張れば完璧になり得る。だからとことん頑張れ、って。

あ一息が詰まる。

だけど、柔軟に考えれば、「頑張る」と「失敗し得る」は両立するし、現実的だ。

システムだけじゃなくて個人的にも、最善を目指して努力する一方で、人間だから失敗することはある、と置いていけば、うまくいかなかったときに、いちいちひどく落ちこむ必要もない。また努力を積み重ねていけばいいだけの話だ。落ちこみやすいわたしは、ずいぶん気が楽になっていった。

国際クラブの行事係としてはもうひとつ、お出かけの計画があった。キリスト教国では教会だけでなく、僧院もあちこちにある。中世、ヨーロッパの貴族や金持ちは、一方で世俗の金儲（もう）けや悪事を働きながら、他方では多くの子どもたちの中から男でも女でも1代に1人は僧院へ送りこみ、やがて教会権力の一端を担わせることで一族の力を高め、また多大な寄付をして一族の罪を浄化させようとした。平安時代の日本の貴族も同じようなことをしている。

現代ではさすがに世俗世界を捨てようとする候補者はぐっと減ってしまい、カトリック世界の頂点に立つイタリアの僧院には、アフリカや南アメリカ、アジアなどの第三世界出身者が増えてきているらしい。

わたしが通っていたイタリア語学校にも、白いスカーフに黒い僧服の 20 歳前後の女性がひとりいて、見た瞬間、この人は日本人か、いやわたしに対する素っ気ない態度から日本人ではない、では韓国人か、と思った。どう見ても黒髪に東アジア人の目鼻立ちだったのである。が、実は南米パラグアイの出身で、アメリカ大陸のインディアンとかインディオと呼ばれる先住民が、アジア人とひどく近い関係にあることをまざまざと感じさせられた。

わたしが小さいころ、日本では世界の 3 大人種として、白人、黒人、黄色人種があると習ったが、フィンランド人のキルシは、あら、4 人種って習ったわよ、白、黒、黄、赤よ、と言う。赤はアメリカインディアンである。インドあたりの「茶」も入れて 5 人種という説もあった。

さて、ミラノの南東の郊外には、キアラヴァッレ僧院の華麗な煉瓦の塔が空高くそびえ立つのが、環状道路からでも見える。

僧院めぐりをしよう。

僧は昔、知識階級であった。日本でも同様だが、皆が字を読めるとは限らない前期中世の社会で、ラテン語の経（聖書）を読む僧はほかの本も読める。インテリで、知識がある。しかし王族や貴族を含む他の階級は基本的に文盲だったらしい。

たとえばフランスにシャルルマーニュという、8 世紀から 9 世紀にかけて権勢を誇った王がいる。彼は文盲でなかったとしても有名なのだが、その父親の小ピピンと呼ばれた王は文盲であった。このことをイタリア語の授業中に知ったときには信じられないほど驚いた。

「王様が読み書きできない？ 文書や手紙はどうしたの？」

「そんなものはご祐筆（ゆうひつ）というのか、書く専門の家来がやればよろしい。王にとって大切なのは政治力や統率力であって、読み書きではないの

よ」

「教養は必要でなかったの？」

「なかったのねえ」

ましてや女性は王妃だろうが公爵の娘だろうが、文盲であるのが長いことあたりまえだったという。日本では 200 年ほどあととは言え、西暦 1000 年ころに紫式部が源氏物語を書いているというのに！

日本では伝統的に圧倒的な男尊女卑、ヨーロッパはそうではないと思っていたのは、誤解だったらしい。少なくとも分野によるのだ。文字に関しては、日本の中世は世界に誇れるほど男女平等であったのである。ヨーロッパで王や公爵などの相続権が娘にもあったのは、日本と大違いだが。

文盲というと、イタリア語学校に通っていたとき、時間割の都合でわたしたち上級者組が初心者組と合併されてしまったことがあった。アフリカのモロッコからの移民のおばちゃんや少年のクラスである。先生のレナータが、あの男の子はともかく、おばちゃんの方はたぶんイタリア語が読めるようにはならないだろうね、教えるけど、と言う。どうして？ とわたしが尋ねると、

「だって母国語で読み書きできないのよ。ことばと文字との関係がまるきりわかってないのよ。それが外国語でできるわけがないじゃないの」と答える。彼女の説明によると、文字と話しことばとの間をイコールでつなげることは、すごく抽象的な問題で、そのジャンプは成人してからでは無理だという。

「今までにも 50 歳代の文盲のイタリア人を教えたことがあるの。彼は熱心だった。だけどどうしても書いてあることがそのとおりに読めなかった。何でも食べ物に読んでしまうのよ」

ふむ。文字と話しことばとの関係。確かにその 2 つには根本的に違う要素があって、変換するには発想の一大転換が要るかもしれない。

英語は字と発音が必ずしも一致しないが、イタリア語は、日本語のひらがなカタカナ同様、字と発音が対応している。そのイタリア語でさえ、成人してからでは文盲を克服できないとは。しかし昔日本では、成人してから読み書きを覚えたひとについて聞いたことが何度かあると思うのだが、そこは個人差の間

題だろうか。

イタリア語といえば、学び始めて、なぜ日本語のアルファベット表記を「ローマ字」というのかわかった。イタリア語の表記方法とほぼ同一である。ローマはどこにある？ イタリア。が、イタリア語とローマ字の表記法はまったく同じではなく、たとえばカキクケコはローマ字では ka ki ku ke ko だが、イタリア語では ca chi cu che co となる。ci はチと読み、ce はチェと読む。イギリス人のアナスタジアがこれを嫌がり、ch をカ行で読むのが許せない、と嘆いていた。英語では確かに church (チャーチ、教会)、chalk (チョーク)、child (チャイルド、子ども) など、ch はチャ、チュ、チヨになることが多い。一方で chaos (ケイオス、混乱状態)、character (キャラクター、性格) などケイ、キヤ、とカ行で読む場合もあるのだが、英語ではこれを「硬い」K 音だと呼んで少し違う扱いをするらしい。

イギリス人とアメリカ人がもっと苦手なのがイタリア語のエとエーの発音で、ふたつともほぼまちがいなくエイと発音する。エーやエが入るイタリア語、たとえば地名のアレーゼは、アレイゼイになってしまう。

同様にオとオーの発音がオウになる。カルチヨ (サッカー) はカルチヨウ、ヴィーノビアンコ (白ワイン) はヴィーノウビアンコウ。彼らの英語訛 (なま) りのイタリア語はひどく聞き取りにくく、どうしてだろうと考えていたら、昔わたしが英語の発音で一生懸命気をつけていたことを思い出した。

日本語でエイという発音は、映画 (えいが) だとか指名 (しめい) だとかの単語の中に存在するのだが、英語の発音となると、tape がテイクではなくテープ、cake がケイクではなくケーキになってしまう。だから日本人が英語らしく発音しようと思うと、かなり意識してエイと言わねばならない。同じように、Coca Cola はコカコーラではなく、コウカコウラと、オウの発音で言わねば英語ではなく、和製英語である。

これを英語人の立場から見ると、彼らにとってエーは不自然で、自然にエイになってしまうのではないか？

しかし、一番英語人が苦手なのは、実はイタリア語の発音ではない。イタリア語、あるいは外国語そのものである。

イタリアに住む外国人を、わたしは少なくとも 30 カ国から来ているひとを知っているが、一番、断トツに、まちがいなくイタリア語が下手なのは、アメリカ人とイギリス人である。英語の習得に汗水たらして苦しんだ日本人のひとりとしては、根性悪を丸出しにして「ざまあ見やがれ」と舌を突き出してあっかんべーをしたいほどで、何年イタリアにいてもまるで話せない、というのがあっちにもこっちにもころがっている。

なぜか。

世界中どこへ行っても、英語を話してくれるひとがいる！

自分が精出して他のことばを覚えなくても、他人が代わりに自国語を話してくれるから、英語だけでかなり生活していけるのだ。

それに比べ、小国の人間ほど、自分の言語は狭い範囲でしか通じず、他のことばを話さなければ他国では生きていけないから、必死で外国語を学ぶ。フランス人、スペイン人のほとんどが、同じラテン系のことばであるイタリア語を、3 カ月かせいぜい半年もすれば、ろくに習わずとも流暢（りゅうちょう）に話しているのを別にすると、スウェーデン、ノルウェーなどの北欧系が、次に上達が早い感がある。

どうももうひとつの理由は、すでに外国語を知っているかどうかではないか。イギリスやアメリカの義務教育に外国語が含まれているのかは、大きな疑問だ。

母国語以外の言語を習う、ということは、もうひとつ別の文化を学ぶ、ということである。頭が柔らかくないとできない。

どうしてイタリア語には名詞に女性名詞と男性名詞があるの？ ドイツ語なんてそれに中性名詞が加わり、北欧言語のひとつにはさらに中性名詞が 2 種類あるらしい（ウツォー）。どうして英語は同じ食べるでもわたしが食べるとき（eat、イート）と、彼や彼女が食べるとき（eats、イーツ）で動詞の最後が違うの？

いやいや、イタリア語なんてそんななまやさしいもんじゃない。

食べる、というイタリア語の原型は mangiare (マンジャーレ) だが、現在形だけでも、主語によって動詞が 6 とおりに変化する。わたしが食べる(mangio、マンジョ)、あんたが食べる(mangi、マンジ)、彼が食べる(mangia、マンジャ)、わたしたちが食べる(mangiamo、マンジャーモ)、あんたたちが食べる(mangiate、マンジャーテ)、彼らが食べる(mangiono、マンジャノ)と。迷っても無駄、しゃべりたかったら拒絶反応は蹴っ飛ばして、丸ごと受け入れるほかない。

だから第 3 言語の習得は、すでに頭が柔らかくなっているぶん、第 2 言語より楽である。わたしの場合、英語は 3 年前アメリカの短大で A (優) をいくつか取ったくらいだから、そのあとのイタリア語はずいぶん楽だった。

スウェーデン人のエヴァにその辺を聞いてみると、スウェーデンでは、テレビ番組で子ども用も含め英語の放送がかなりあることと、大学などで使われる専門書は読むひとが少ないから、特に理系の場合、もうけにならないスウェーデン語の翻訳はまずないこと、よって大学生なら英語の専門書が読めてあたりまえになる、と言っていた。

彼女自身はスウェーデン語と、スウェーデン語に近いドイツ語、それから英語、イタリア語の 4 カ国語を話す。ゴッテンブルグ (スウェーデン語ではイエテボリ) 交響楽団の経理か事務かを勤め、7 年間世界中を回って日本にも来たと言っていた。フィンランド人のキルシもフィン語、英語、滞在していたスペイン語、そしてイタリア語の 4 カ国語を達者に話す。

日本にいたころそれを聞いたらおったまげていたと思うが、3 カ国語を話すトリリンガルの今となつては、ああ、できるだろうな、と思う。

もちろんわたしも 3 カ国語がみなネイティブなみにできるわけではなく、日本語のレベルが 100 としたら英語は 80、イタリア語が 50 くらいにあたる。たとえば日本でわたしが誰かと話している後ろで、別のふたりが話しているとす。わたしは自分の相手と話しながらも、後ろの会話の 3 割くらいは理解している。それが英語だと 5%くらいで、イタリア語だとまったく無理。英語はリスニングが今ひとつ苦手、たぶん、他人が言うことに耳を傾けるより、自分が

話したいという欲求のほうが強い、というわたしの性格が影響しているんじゃないかと思う。イタリア語のほうはまだ文法を完全制覇していないし、ポキャブラリーも乏しい。

ま、バイリンガルだのトリリンガルだのというのは、そのことばで生活できる、というレベルをさすので、それは、なんとかできる。

ただし、わたしのイタリア語のまちがいは、相変わらずすさまじい。

秋に林を散歩していると、夫が、ここには蕨（わらび）が生えているから今度春に採（と）りに来よう、と言った。夫は生物学を専攻していたせいもあって植物にかなり詳しいのだが、わたしはどうして夫が秋の枯れた羊歯（しだ）の葉を見て、それを蕨が成長した姿と断言できるのか、そして、きわめて日本的だと信じていた蕨がヨーロッパにもホントに生えているのか、半信半疑だった。

春になって家族で行って見たら、確かに日本で見た蕨と同じものが生えていた。それでもまだわたしには100%の確証がなく、煮て食べてみたあとで初めて、これはまさに蕨だと納得し、知り合いの、これも半信半疑の日本人家族を誘って採りに行った。

それを見ていたイタリア人が、あんたたちいったい何を採ってるんだ？ と尋ねてきた。わたしはそのとき羊歯をイタリア語でなんと言うか知らなかったから、「しいて言えばアスパラガスに似たもの」だと答えた。土から出たてで、まだ葉があまりはえていない長い莖、というところが似ていると思ったのである。

「それ、うまいのか？」男性はいぶかしげに尋ねた。

「そう、とっても美味しいのよ。ただね、この植物には苦味（にがみ）があるの。炭酸を入れたお湯で茹（ゆ）でて、その苦味をとらなくちゃいけないのよ」

わたしはそのとき、蕨の「えぐみ」とか「あく」とかいうものをイタリア語でどう説明したらいいかわからなかった。以前英語で調べたときには、「えぐい」

はビターという語のようで、「苦い」は「えぐい」とは少し違うんじゃないかと首をひねったが、広い意味ではあてはまるようだった。

この「苦味」をわたしは盛大にまちがえた。

イタリア語で「苦い」はアマーレというのだが、わたしはアモーレ、つまり「愛」と言ったのである。

「この植物には愛があるから、茹でてその愛をとらなくちゃいけないの」と大マジメに言ったわけだ。背広を着たこの紳士は眉間に深〜いしわを2本よせて、わたしの説明を聞いていた。「この外国人は絶対、何かまちがえてる！しかし、何を、どう、まちがえたんだ!? まるきり見当がつかない」と悩んでいたに違いない。あとで謎は解けたらどうか？

それから、わたしが肩から白い三角巾で右腕を吊っていたとき、「高い窓を拭（ふ）いてて、脚立（スカーラ）から落っこちて肩（スパッラ）を脱臼したの」と2時間で10人のひとに会うごとに説明をしていたら、終いには「肩（スパッラ）から落っこちて脚立（スカーラ）を脱臼しちゃったの」と言っていた。

別のときには、「歳をとるとお乳が垂れるのも重力のせいよね、地球の重力には勝てないわ」と言おうとして、重力（グラヴィタ）を妊娠（グラヴィダンツァ）と言いまちがえ、「地球の妊娠には勝てないものね」と言ってしまったこともある。ありえない。その場は爆笑に包まれた。

こんなまちがいの結果、たいてい雰囲気になごむから、それなりに役には立っていると思うことにしている。外国人が生活していることばをまちがえるのはあたりまえではないか。恥ずかしがってる余裕なんかない。

ま、何カ国語、といっても、ヨーロッパ言語である限り、近い。何せ字が同じ。これは大きい。見たとたん、ずっと字が目にも、つまり脳ミソに入っていく。日本で駅の掲示板の中国語を隣の日本語とよくよく見比べると、半分くらいは見当がつくようなものである。それに、大陸では車で数時間走れば言語が違うことが珍しくないから、異言語は身近である。

字が違うロシア語、ギリシャ語は多少敷居が高いが、それぞれラテンアルフ

ァベット(英語のアルファベットをこう呼ぶ)に1字1字置き換えられるので、それさえ覚えればそんなにひどいものではない。わたしが20代で当時のソ連、今のウズベキスタンのあたりを母と旅行したとき、広場の建物の上を書いてあるロシア語を、持参のロシア語即席会話帳でラテンアルファベットに置き換えてみると、ひとつの単語はレーニンで、もうひとつは革命だった。

これがまるで字が違う言語を3つ、たとえばアラブ語と英語と日本語だとか、タイ語とフランス語と韓国語の読み・書き・話す・聞くができるとなると、ちょっと「尊敬する……」が、そういうひとにはわたしはまだ知り合いがない。

僧院に話を戻すと、1000年近く前のヨーロッパでほんの一握りの知識階級に属していた僧の知識には、キリスト教だけでなく薬草や医学、そして意外なことに科学や農業の分野も含まれていた。

カリーの旦那のイタリア人のイヴァンによると、キアラヴァッレ僧院の始まりは、12世紀にフランスからやって来たベネディクト派の僧たちで、沼地であったミラノ南部の土地に溝を掘って排水をよくし、肥沃な耕地とさせたという。農民の生活改善と食糧増産に多大な貢献をしたのだ。

その話をもうひとつの、すっきりと簡素なモリモンド僧院の僧に話した。見学の許可と予定を組むための下調べのときである。当時もっばらの話題であったイスラム教の過激派の話から、わたしが政教は分離すべきだと言うと、彼はそれはいいが、自分は、宗教が精神的な支えとなるだけでなく、実際の生活の中でも役に立つ、行動する存在であるべきだと信じている、と、たくましい体格に目を光らせて述べた。

カトリック教会では慈善がひとつの柱である。教会前の広場には決まってカリタ(慈善)と大きな字で書かれた、おとなが「気をつけ」をして立ったら2人くらい入れそうな、背の高い黄色い箱がある。「あなたがもう着なくなった服、靴、かばん、シャツなどを入れてください、貧しい人々に届けます」とあり、わたしも何度か古着を入れた。

活動資金は寄付でまかなわれている、らしい。大きな教会では、ひざまずく

ためのクッションが前についた、硬い木の椅子の背もたれの後ろに、献金用の封筒が置いてあるのを見ることがある。坊主の孫であるわたしの亭主は、坊主はどこも金儲けが得意だとくさすが、一般庶民がなけなしの金をはたいているふうでもない。十代の子ども用に堅信札（けんしんれい）の前の講義をかってでている、うちに掃除に来てくれているシルヴィアはまちがいなく庶民のひとりだが、そんなに寄付していない、と言っていた。一方で金持ちは古くから巨額の寄付をしたり、聖書の1場面を大きな油絵で描かせて登場人物のひとりの顔を自分に似せさせ、教会の壁にかけさせたりしている。

そこで日本の「葬式仏教」を考えると、本気でお坊さんに問いかけたくなる。

あなたは宗教者ですか？

あなたも世の中をよくするために、積極的に何かしようとは思いませんか？

できるとは思いませんか？

あなたたちがもう少しまともな活動をしたら、怪しい、大金をはたいて壺を買わせる「宗教」や、たくさんの人殺しをさせたオウムに、迷いこむひとが減るのではありませんか？

心の闇を抱える人々、自殺したいと悩む人々に、インターネットを通じて魂を照らす灯りをさしのべられませんか？

他国の貧しい人々、地震の被災者に救援物資を集めて送る活動はしないのですか？

日本の貧しい子どもたちを探し出し、一方で寄付を集めて、教育や食べ物の援助をしないのですか？

僧院めぐりの下見には、結局2週間かけて3度も出かけるはめになった。イタリアの教会の多くは昼の12時に閉まり、もう一度開くのは夕方の4時、5時になる。自宅からミラノ南部まで車で1時間はかかるので、朝、えいやっと早く出ないと1回にひとつしか入れないのだが、手術と化学療法のあとでなんとなく馬力に欠け、家を出るのをぐずぐずしてしまう。夕方は鍵を持たない子どもたちが帰ってくるので家を空けられない。わたしに昼寝はあたりまえでもあ

る。

12時半から4時前後まで閉まるのは個人商店も同様で、家に帰って昼ご飯をきちんと食べるためだ。ミラノ中央部の観光案内所でさえ屋閉まっていた時には、眼を疑った。並んで開くのを待っていたイタリア人に愚痴ると、イタリアで食べることは聖なることよ！と冗談で返された。

1日のツアーには3カ所くらい回りたかった。ミラーソレの僧院は農場に近い状態になっていて却下。ヴィボルドーネの僧院はいまだに35人の尼が暮らしており、建物も可愛らしい印象だった。「尼の日課を邪魔してはいけません」「尼の生活場所には入れないですよ」、と釘をさされながら、ここに決定。

ツアーを組むには、昼飯場所も確保しておかねばならない。あいにくその日、間抜けなわたしは財布を家に置いていて、ここぞと目をつけた小さなレストランの試食をすることができなかった。しょうがないから外のメニューと電話番号をメモし、道を通るひとに評判を聞いて、見当をつけた。

最後に、英語のガイドをつければ手配は完了する。以前、しかけ噴水の見事なライナーテの庭園で英語のガイドをしていた女性に頼むと、割に低料金で引き受けてくれた。

日程の都合上、この僧院めぐりはわたしの2度目の入院中になってしまった。ドイツ人のカリンにあとを託したのだが、秋の長雨にぶつかって低地であるミラノ南部は水没しかけ、惜しくも延期。実施はわたしの日本への帰国後となった。

子どもたちの通っているインターナショナルスクールには、毎年秋休みが1週間ほどある。夏休みが2カ月と1週間、冬休みも1週間、春休みが1週間あって、カリキュラムは違うといえど、どうして日本とおんなじような子どもの教育が成立するのかまったく不可解だが、ともあれ、この秋はぜひとも夫と一緒に休みをとってもらって、旅行に行きたい。

シチリアへ行こう！

寸前にエトナ火山が噴火し、「マドカが行くから噴火したのよ」とイタリア人

にからかわれた。飛行機が飛ぶか危ぶんだが、パレルモにはなんとか着けた。レンタカーで移動するが、各地の都市地図を買っておかなかったおかげでかなり迷う。ふだんからミラノで車の運転にまごついていたら、「南の交通事情はもっとすごいよ」と何度か聞かされていたが、実際、シチリアの古くからの商店街での一時駐車はセンターライン上。片側1車線の道のど真ん中に1列に車が止められ、両側をのそのそとフツーに車がすれ違う。これが、日本のように道の端に車を止めると追い越しが難しく渋滞する元（もと）だが、センターライン上に止めると車はずっとその両側を通れるので、渋滞にはならない。合理的である。とはいえ、目を疑った。

道路が5本交わる大交差点に、工事中で信号がない。ぎっしりと各方向向けの車がメチャクチャに詰まり、亭主は悲鳴をあげるのでわたしが運転を替わった。割りこむコツは、抜け目なくあたりの様子をうかがっておいて、すこし空間ができたその瞬間に、別の車の鼻先を抑えるようにスーッと自分の車を前に出すこと。ただし急発進、急ブレーキは厳禁。

アメリカ人向けの英語の安旅行ガイドを参考にしてホテルを選んだら、道路に面した高い木の塀に、ペンキの剥（は）げかけたアーチを描く大きな木の扉。中庭は真っ暗なうえ、ここに車を止めろといわれた場所は乱雑で、まるで資材置き場。貴重品は絶対車内に残せそうになかった。正面階段はすり減っているとはいえ確かに朱の大理石だったが、中も外もロクに灯りがなく、ほとんど幽霊屋敷。

トイレのあかりとりの窓枠にはガラスがはまっておらず、寝室の窓は廊下側。もう1室の窓は高くて空しか見えない。さすが安旅行ガイドのご推薦。ホテルの親父の紹介してくれたレストランも、紙のテーブルクロスにテレビがつきっぱなしという、ミラノではありえない庶民的な雰囲気だったが、味はミラノを超える絶品だった。あんなうまい煮魚は食べたことがない。「海水」と名づけられた澄んだ塩味の煮汁が、料理法は想像できなかったが信じられないほどうまかったうえに、魚自身が新鮮で風味がよく、しかも魚に火が通った瞬間に火を止めたとおぼしき、魚の味を最大限とどめる絶妙の煮方だった。

その後どうにもあの味を再現したいものだと頭をひねり、洋の東西を問わず出汁（だし）の基本は動物性材料と植物性材料の組み合わせだから、あれは香味野菜であらかじめ出汁をとっているに違いないとあたりをつけた。で、玉ねぎと人参（にんじん）、セロリ、それに庭から採（と）ってきた茎付きのパセリや月桂樹の青い葉、茎付きのローズマリーを水に入れてしばらく煮たあとで、洋風だしの素（マギーブイヨンが一番）を足し、塩胡椒（こしょう）をしておいた鯛（たい）や鰈（かれい）を入れると、満足する味に仕上がった。鯖（さば）や鰯（いわし）などの青魚なら、これに缶詰のトマトを入れてもうまい。いっぺん試してごろうじませ（ごらんなさい）。

翌日、古代ローマ遺跡を訪ねながら走っていると景色が荒涼としている。北のミラノ周辺だと米や麦、ポローニャあたりだと牧草地やぶどう畑が続くのだが、ここシチリアでは火山灰のせいか土がいかにも痩せていて、耕地が少なく荒地が多い。農家であろうか、点在する家の造りが、いかにも貧しい。マフィアを産んだ貧困がひしひしと感じられた。

そのくせ町に入ると家はひしめきあって道は狭く曲がりくねっている。一戸建てが少なく集合住宅が多いのは、都市国家の名残りか。ミラノも同じではある。ヨーロッパの町はどこも、歴史上何度も、東から攻めこまれたり西から攻め入れられたりしている。その侵略軍から家を守る術（すべ）だったのだろうだが、今なら郊外に出ればいくらでももっとゆとりをもって家が建てられるだろうに、と思う。

カタコンベと呼ばれる地下墓地在（すき）まじかった。娘は夢に出そうだと嘆いた。洞窟の両側の5段ベッドとでもいうべき棚に、ミイラの実物が何百体も残っていたのである。ローマのカタコンベではさすがに実物は置いていなかったのだが、ここではミイラが目鼻が骸骨の黒い穴となっていて、ぼろきれと化した服から突き出した手の骨も足の骨も見える。一番新しいのは1930年代で、かわいらしい写真まで添えられた小さな女の子のミイラだった。遺族は見世物になっている遺体に文句を言わないのだろうか、と、見ているほうが義憤

を感じる。

ともあれ、シチリアで一番よかったのは青い海と空だろう。ミラノの秋がどんよりと暗く気が滅入るのに比べ、ここの明るいこと！

朝海岸を散歩していると、むこうから犬を連れて水着姿の女性のふたり連れが来る。ひとはビキニなのだが、どう見てもふたりとも60歳はとうに越している。ひょっとしたら70過ぎかもしれない。で、ビキニにふさわしい、凹凸（おうとつ）のある肉体なのである。

ずるい。

にこやかにわたしがおはようを言い、「ここはいいわ。きれい、海も空も青くて！」と笑いかけると、「でしょう、ほんとにきれいよね。でもそれしかないけどね！アハハ」と彼女たちも豪快に笑った。

このひがんだところの微塵も感じられない陽気さがイタリア人のいいところだ。

ミラノに帰って、疲れたわたしは予定通り（？）1週間寝こんだ。

それでいい。

人生は一度きり。楽しまなければ損である。